博物館と学校教育の連携（3）

－ボランティア活動の試み－

渡　辺　　勤

1　はじめに

次の文章は、当館においてボランティア活動を展開している中学3年生の体験談である。

活動するボランティアたち

今年の4月から「さきたま青少年ボランティア」の一員として、様々な活動に参加してきました。イベントの受付や補助、参加者へのアドバイスが私たちの仕事です。

初仕事は、4月の「土曜おもしろ博物館ー実感！古墳探検ワークシートー」でした。ワークシートの問題を実際に解いた後、参加者の受付や採点、アドバイスをしました。とても楽しく、充実した時を過ごすことができたのを覚えています。

夏休み、はにわ作りとまが玉作りに参加しました。ボランティアとしてお手伝いやアドバイスをしなくてはならなかったのですが、それよりも作ることが楽しく、製作に熱中してしまったこともありました。まが玉作りのとき、決してうまくないのですが参加者の方のお手伝いをしたら、「やっぱり上手ですね」とほめていただいたことがありました。「私でも何かを教えられるのだ」と思い、うれしくなりました。

このボランティア活動は、自分のためになるボランティアだと思います。たくさんの出会いやたくさんの経験を通して様々なことを学びました。そして、そのすべてが私自身を成長させてくれているような気がします。

自分のためになるこのボランティア。でも誰かのために少しでも役立ちたいという気持ちを忘れずに、楽しみながら続けていきたいと思います。（加須市立加須東中学校3年　小川芙美香）

この生徒は、本年度当館が導入した「さきたま青少年ボランティア」に登録し、積極的に活動している一人である。

阪神大震災以来、我が国においてもボランティア活動への関心が急速な高まりを見せており、生涯学習時代を迎えた今日、ボランティア活動は社会の要請ともなってきている。学校教育においても、豊かな人間性を育む教育の推進に、ボランティア活動などの体験活動の充実が求められている。

本稿は、こうした動向を踏まえ、博物館等と学校教育の連携をボランティアの面から、その試みをもとに考察しようとするものである。

2　教育改革の動向とボランティア

変化の激しいこれからの社会において、「ゆとり」のなかで「生きる力」を育むことを重視する教育を提言した中央教育審議会第一次答申（平成８年７月19日）は、「これからの地域社会における教育の在り方」のなかで、その具体的な充実方策の一つに「活動の機会の充実」をあげ、青少年期におけるボランティア体験の教育的意義の大きさを次のように指摘している。

「他者の存在を意識し、コミュニティーの一員であることを自覚し、お互いが支え合う社会の仕組みを考える上で、自己を形成し、実際の活動を通じて自己実現を図っていくなど、青少年期におけるボランティア体験の教育的意義は特に大きい。子供たちの、社会性の不足が指摘される今日、体験的な学習としてボランティア活動に青少年が気軽に参加できる機会を提供することは急務であると考える。」

このため、地域の博物館等においても、ボランティア活動を実際に体験したり、活動の理念や必要な知識・技能等について学習する機会を提供することは極めて重要な役割であるといえる。

また、同答申を受けた教育課程審議会の『中間まとめ』（平成９年11月17日）は、「教育課程の基準の改善の基本的な考え方」のなかで、「時代を超えて変わらない価値あるもの」の一つに「ボランティア精神」をあげ、子供たちにしっかりと身に付けさせていかなければならないとし、学校教育にボランティア活動を位置づけている。具体的には、「ボランティア活動は、地域社会の一員であることを自覚し、互いが支え合う社会の仕組みを考える上で意義のあることであると同時に、単に社会に貢献するということだけでなく、自分自身を高めるためにも必要なことであり、大切なことであるという意味で、大きな教育的意義があると考える。」として、特に体験的・実践的な指導を充実する上で重要な機能を果たす特別活動おいて、ボランティア活動を一層促すことを期待している。また、新設が予定される「総合的な学習（仮称）」においても、横断的・総合的な学習活動を展開する上で、自然体験やボランティアなどの社会体験といった体験的な学習を重視している。

次に述べる２つの実践は、こうした教育改革の動向を踏まえつつ、学校教育との連携を図りながら取り組んだ体験学習的なボランティアの実践である。

3　さきたま青少年ボランティア

「さきたま青少年ボランティア」（略称ＳＪＶ＝Sakitama Junior Volunteer）は、青少年に体験活動的なボランティア活動の場を提供すべく、当館の教育普及事業に限り、本年度試行的に導入したボランティアである。その概要は以下のとおりである。

(1)「さきたま青少年ボランティア」の概要

①目　的

埴輪や勾玉の製作、七夕馬やワラジづくり、綿くりの体験など、当館の特色である考古及び民俗に関する体験活動的なボランティア活動の場を青少年に提供し、ボランティア精神を培うとともに、地域の史跡・文化財等を大切にする心を培い、豊かな人間性を育むことを目的とした。

委嘱式後のボランティアたち

② 対　象

行田市内及び隣接市町村の中学校、高校、大学等に在学または同地域に在住する生徒や学生等を対象とした。

③ 募　集

関係小・中・高等学校に募集要項を配布するとともに、行田市及び隣接市町村の広報紙及び新聞に募集要項を掲載した。

④ 応　募

応募には、下記の条件を課した。

・ボランティアに興味・関心があり、活動意欲のある人（ボランティアに対する考え方を含め、応募理由を原稿用紙1枚以上にまとめ提出）
・未成年者は保護者の同意が必要
・本人が直接来館し申し込む

※応募者の応募理由

「ボランティアに興味がある」
「人の役に立ちたい」
「いろいろな人と交流したい」
「将来の職業に役立てたい」
「学芸員課程に役立てたい」
「考古学の勉強をしたい」

など、それぞれが目的意識をしっかりと持って応募してくれた。

おそろいの帽子をかぶって古墳の話を聞くボランティアの青少年たち＝行田市の埼玉古墳群で

ボランティア委嘱

さきたま資料館

はにわ作りに補佐役

行田市の県立さきたま資料館（吉川国男館長）は、はにわづくりなどの活動を手伝ってもらう「さきたま青少年ボランティア」を組織し、十九日に十八人を委嘱した。

県内の博物館・資料館のボランティア組織は初めてという。

同資料館は埼玉古墳群内にあり、国宝の稲荷山鉄剣などを展示している。教育普及活動にも力を入れており、活動の補助と体験学習をするボランティアを公募した。

中学生から大学生、社会人まで応募があり、まず、将軍山古墳展示館開館記念「古墳ウルトラクイズ」の運営補助役から活動を始める。夏には、はにわ、まが玉づくりの体験学習を手伝うといった多彩な活動を予定している。

越谷市千間台の高校二年郷間恵さん(一五)は「看護婦希望なので、いろんな体験を積んで心を広くしたい」と話していた。

委嘱式の後、県立南教育センターの田丸淳哉・社会教育主事から「ボランティアは学びの世界」という話を聞いた。

朝日新聞
（平成九年四月二十一日付）

⑤ 登録者19人（男３人、女16人）

中学生10人（行田市内８人）、高校生３人、大学生４人、社会人２人

⑥ 活動内容

土曜おもしろ博物館やさきたま風土記の丘教室等、当館が主催する教育普及事業の中で、体験学習的な事業の事前体験、準備、参加者への支援等

※別紙「平成９年度さきたま青少年ボランティア活動」参照

⑦ 活動日

原則として、休業土曜日、夏休み等の教育普及事業開催日

※別紙「平成９年度さきたま青少年ボランティア活動」参照

⑧ ボランティアへの対応について

ア、ボランティアへの対応は、主に教育普及担当職員があたった。

イ、登録者には、「さきたま青少年ボランティア」を委嘱した。なお、委嘱期間は平成１０年４月19日から平成10年３月31日までとした。

ウ、ボランティア全員を対象にボランティア保険に加入した。

エ、ボランティア全員に「さきたま青少年ボランティア帽子」を貸与した。

オ、年度末、ボランティアに感謝状を贈呈した。

さきたま青少年ボランティア帽子

カ、ボランティア活動を円滑に行うため、回数は少なかったが、「さきたま青少年ボランティア連絡会議」を開催した。

キ、教育普及事業の事前体験を中心として、ボランティアのための研修の機会を設けた。

ク、「さきたま青少年ボランティア」の活動を必要に応じて当館の広報紙等を活用し広報した。

ケ、 交通費、昼食等はボランティアの負担とした。

(2) 学校との連携

特に行田市を中心とした中学校との連携を次の点で図ってみた。

①募集要項の配布の時に、ボランティア等の担当教師に当ボランティアの趣旨を説明し、生徒への働きかけを依頼した。その際、生徒の自主性を重んじるため、働きかけは校内に掲示する程度にしていただいた。

②応募に際し、直接当館へ申し込むのではなく、担当教師を経由していただいた。その際、原稿用紙１枚程度にまとめる応募理由に関し、指導・助言も加えていただいた。そのため、当ボランティアの趣旨を理解し、目的意識をしっかりと持って応募してくれた。

③当館から、活動の様子を担当教師へ報告し、学校からもボランティアへ評価を加えていただいた。

④当館の広報紙『さきたま』第９号に、ボランティアの体験談を含めた活動の様子を紹介し、県内の小・中・高等学校及び社会教育施設等に配布した。

⑤活動修了後には、館長より、感謝状を贈呈したが、学校内でも紹介していただいた。

当ボランティアは、当館とボランティア個人の関わりが中心であるが、以上のような連携を学校と取り合うことによって、参加したボランティアにとっても大きな励みになるとともに、他の生徒へも良い刺激となったようである。

(3) 成果と今後の課題

本年度、試行的に導入した「さきたま青少年ボランティア」であったが、その成果としては次のような点があげられる。

○活動がボランティア自身の体験学習になっている。

○事前に事業の体験をするため、参加者に関わりやすい。

○参加者、特に子どもたちもボランティアに関わりやすい。

○活動を通して、ボランティアを実感し、ボランティア精神を培うことができる。

平成９年度さきたま青少年ボランティア活動

月	日	曜	事　業　名	主な活動内容	人数
4	19	土	委嘱式	委嘱式 講話	１８
4	26	土	土曜おもしろ博物館 －実感！古墳探検 ワークシート－ 将軍山古墳展示館開館記念 行事－古墳ウルトラクイズ－ （準備）	ワークシートを体験 参加者へのアドバイス 受付、採点 当日の役割分担 看板の製作 その他の準備	１０
4	29	火	将軍山古墳展示館開館記念 行事－古墳ウルトラクイズ－	準備、リハーサル 古墳ウルトラクイズの運営	１４
5	24	土	土曜おもしろ博物館 －実感！古墳探検 オリエンテーリング－	オリエンテーリングを体験 参加者へのアドバイス 準備、受付、採点	8
6	28	土	土曜おもしろ博物館 －実感！古墳探検 ワークシート－	参加者へのアドバイス 準備、受付、採点 新ワークシートづくり	8
7	22	火	さきたま風土記の丘教室 「はにわを作ろう」（準備）	古代劇の準備 埴輪の製作を体験	7
7	25	金	さきたま風土記の丘教室 「はにわを作ろう」	受付 埴輪作りの援助	6
7	26	土	さきたま風土記の丘教室 「はにわを作ろう」	受付 埴輪作りの援助	6
8	2	土	さきたま風土記の丘教室 「七夕馬を作ろう」（準備）	マコモ刈り、準備 七夕馬の製作を体験	5
8	3	日	さきたま風土記の丘教室 「七夕馬を作ろう」	受付 七夕馬作りの援助	5
8	20	水	さきたま風土記の丘教室 「まが玉を作ろう」（準備）	まが玉の製作を体験 埴輪の野焼きの準備	5
8	22	金	さきたま風土記の丘教室 「まが玉を作ろう」	受付 まが玉作りの援助	7
8	23	土	さきたま風土記の丘教室 「まが玉を作ろう」 埴輪の野焼き	受付 まが玉作りの援助 埴輪の野焼きの援助	6
8	26	火	さきたまアカデミア 「博学融合」（まが玉の製作）	受付 まが玉作りの援助	4
9	27	土	土曜おもしろ博物館 －実感！古墳探検 オリエンテーリング－	問題看板の設置 参加者へのアドバイス 受付、採点等	5
10	25	土	土曜おもしろ博物館 －実感！古墳探検 古墳ウルトラクイズ－	準備、リハーサル 古墳ウルトラクイズの運営	8
11	14	金	県民の日記念行事 －わくわくドキドキ考古学－	受付 事業に参加 午前　ワラすぐりをする	6
11	22	土	土曜おもしろ博物館 －縄を作って、 縄とびをしよう－	ワラ打ちをする 縄作りを体験 午後　受付 縄作りの援助	4
12	13	土	土曜おもしろ博物館 －凧を作って、 凧あげをしよう－（準備）	凧作りを体験	3
1	11	土	土曜おもしろ博物館 －凧を作って、 凧あげをしよう－	準備、受付 凧作りの援助	3
2	14	土	土曜おもしろ博物館 －糸車をまわしてみよう－	準備、受付 事業に参加	7
3	14	土	土曜おもしろ博物館 －ワラゾウリを作ろう－ 感謝状贈呈式	午前　ワラすぐりをする ワラ打ちをする ワラゾウリ作りを体験 午後　受付 ワラゾウリ作りの援助 感謝状の贈呈	１０

受付をするＳＪＶ

「七夕馬をつくろう」の準備をするＳＪＶ

勾玉作りを体験するＳＪＶ

古墳ウルトラクイズ大会を運営するＳＪＶ

……「さきたま青少年ボランティア」体験談……

収穫大きいＳＪＶ

行田市立埼玉中学校２年　黒川　直実

私は今、ＳＪＶとして毎月第４土曜日に資料館へ行き活動を続けています。中学生なので時間がないと感じることもありますが、収穫は大きなものがあります。今まで知らなかった人と話をしたり、教えたりすることが何とも楽しいのです。日常生活や学校ではできないことを体験できることが、気分もいいし、とにかく楽しいのです。

たしかにボランティアは、つらいことや難しいこともあります。問題は「やるのか、やらないのか」だと思います。何事もやる気がないのならやらないほうがずっと楽ですし、やったところで意味がありません。「名ばかりの体験にさせない」ことが私の目標であり、まさにやりたいからボランティアをやっているのです。

「チャンスの神は前髪しかない」

今、このボランティア活動をしていて、自分が楽しい。「前髪をつかみそこねなくて良かった」と、自分に充実感を感じています。

新しい体験や発見があるＳＪＶ

花咲徳栄高等学校１年　黒川　光子

私は、２年前土曜おもしろ博物館に参加しました。それ以来資料館の事業には、休まず参加するようになり、いつの間にかお手伝いをするようになっていました。自主的にボランティア活動をしていたのです。

ボランティア活動からは、新しい体験や発見を得ることができます。一つの作品を一生懸命に作り、完成した自分の作品を人一倍喜んでいる子供たちや、子供とのコミュニケーションをとろうと子供以上に熱心な大人の方々、そして何よりもアシスタントとして走り回るボランティアのメンバーや職員の方々、一人一人の行動が日々大きな成果を上げているのだなと感じています。

将来は、考古学の学芸員を志望しています。人前で話をしたり、手伝いをするといった多くの活動をこのボランティアでできるというとは、私にとってとてもうれしいことです。活動をしていると様々な方からボランティアについて問いかけられますが、皆さんとっても感心してくださいます。長くこのボランティアを続けていきたいと思っています。

楽しみながら学べるボランティア

武蔵大学３年　藤倉千夏

私は現在、大学の学芸員課程で博物館学などを学んだり、博物館の見学実習に行ったりしています。実際に資料館の教育普及に携わることができることは、私にとっても魅力的で、資料館を内側から見ることができる良い機会だと思い、このボランティアに応募しました。

４月の「古墳ウルトラクイズ」と夏休みの「風土記の丘教室」に参加して、思った以上に得たものは大きかったと感じています。埴輪、七夕馬、勾玉作りやマコモ刈り、埴輪の野焼きなどを体験して、私自身も埼玉古墳が身近になり勉強になりました。

また、教室に参加した方たちが一生懸命勾玉を作り、完成した自分の作品をうれしそうに持ち帰る姿を見て、教育普及は資料館と地域の人々をつなぐ大事な役割をもっていることを痛感しました。楽しみながら学べる、とても良い環境だと思います。このボランティアを通じて資料館の方をはじめ、実習生の先輩、ボランティアの中高生など幅広い出会いがあったことも有意義なことです。

自分が役に立てているかどうかは分かりませんが、このボランティア自体も、「さきたま資料館」の教育普及の一環としてより多くの方に参加していただいて、もっと資料館を身近に感じてくれたらいいなと思います。

実践的なボランティア活動を目指して

調査補助員　市川康弘

一昨年の学芸員実習で知り合った友人に誘われたのをきっかけに、私は「さきたま青少年ボランティア」に加入し、さきたま資料館が行っている教育普及活動のお手伝いをさせていただいています。もともと教育普及活動に興味があった私にとって、その現場に直に関わることが出来たのは大きな収穫であり、また、さきたま資料館でアルバイトをするきっかけをつくってくれた運命的なものでありました。

そのためかボランティア活動にも自然と力が入り、毎月その日が来るのを心待ちにしている自分がやけに生き生きとしていたように思えます。

初仕事となった４月の「古墳ウルトラクイズ」では、重たいアンプを両手に２つ持ちながら古墳の階段をかけ上がり、強風吹きすさむ中、横断幕を身をもって支えました。当日は500人を超える人達がこのイベントに参加してくださったので頑張った甲斐がありました。その後も、土曜おもしろ博物館等での参加者の方々とのコミュニケーションを通じたり、教育普及活動の方々と一緒になって、糸車まわし等の民俗体験を行う機会を得るなど、年間を通じて様々なことを学びました。また、共にボランティア活動をしている中・高生、大学生の自分とは異なった新鮮な感覚に触れられたのも意外な収穫でした。

今年度の活動を振り返ってみると、自分のために行ったというイメージが強いので、次年度はそのことに留意し、館が行っている教育普及活動により実践的に取り組んでいきたいと思っています。今後も「青少年」と呼ばれるのがきつくなるまでは、この事業に参加していく所存です。

○参加者も、年齢の近い人のボランティア活動に触れられる。

○参加者のニーズに幅広く対応できる。

○ボランティアを通し、事業への参加者が増えている。

○登録者のいる学校では、ボランティアが話題になっているという。

※ボランティアの体験談（p.106）も参照

② 今後の課題

◆ボランティアの活動が受け身になってしまった感がある。今回、ボランティア自身で土曜おもしろ博物館のワークシートを作成したように、ボランティアも企画に関われる体制をつくり、ボランティアの自主的な活動の場を用意していく必要がある。

◆事業の参加者に対する支援を行う際、ボランティアが自信を持って活動するためには、事前学習、事前体験の時間を十分に確保する必要がある。

◆ボランティアの評価として、ボランティアの活動を紹介する広報活動を積極的に行う。特に登録者の学校との連携を密にする必要がある。

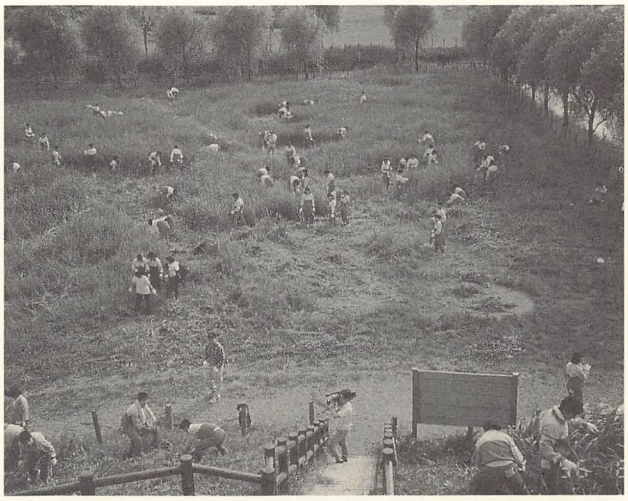
◆活動するボランティアが固定化してしまった感がある。ボランティアの評価を工夫するとともに、いつでも参加しやすい雰囲気づくりが必要である。

◆ボランティアの交通費及び昼食等の問題がある。

◆来年度は年齢制限をなくし、高齢者の豊かな経験を生かし、幅広い体験を可能にしたい。特に、地域には機械化される以前の農具を実際に使用し、農作業を行ってきた方々もいる。そうした方々の生涯学習の場としても、ボランティア活動の機会を拡大する必要がある。

4　埼玉古墳群除草ボランティア

昨年度６月、市内の中学校（行田市立忍中学校）と連携を図り、「埼玉古墳群除草ボランティア」を受け入れた。生徒会活動のＪＲＣ（青少年赤十字）委員会の呼びかけに、土曜日の午後、なんと２２１名もの生徒が参加し、稲荷山古墳の前方部を中心に、丸墓山古墳の周囲等の除草に取り組んでくれた（次ページの新聞記事参照）。なお、学校側のねらいは次の通りであった。



除草ボランティアに取り組む生徒たち

・社会奉仕の精神を養い、地域社会の一員としての自覚を育てる。

・思いやりの心や、協力の大切さを理解させる。

・公共の施設や設備を清潔にし、大切に扱う態度を身につけさせる。

・体験的活動を通して、成就感を達成させる。

・生徒会と連携し、全校生徒に呼びかけ、生徒の自主的活動として位置づける。

・地域の歴史的文化財に触れることにより、学習の場としても位置づける。

この実践化にあたっては、担当教師との連携をとにかく密にした。具体的には、学校側から、つまり生徒の側からのボランティアの申し入れを当館が受け入れるというかたちで行った。ボランティアを申し入れるために、当館を訪れたＪＲＣ委員会の代表の生徒たちが、当館を出るときのホットした表情が今でも思い出される。それは、純粋に「ボランティアができるのだ」という喜びの表情をしており、ボランティアへの意欲を感じた。

そして、学校内での呼びかけが始まった。呼びかけは、生徒の自発性を尊重するため、あえて教師からの呼びかけは行わず、生徒総会で呼びかけたり、ボランティア募集のポスターを作成し、廊下に掲示するなど、ＪＲＣ委員会が行ったという。こうしたＪＲＣ委員の意気込みによって、多くの生徒が集まったといえよう。背丈もある雑草と格闘した生徒たちは、自らの意志で参加したボランティアでもあり、次ページの感想文にもあるように充実感を味わってくれたようである。友達に誘われて参加した生徒も、実際に体験することでボランティアの良さを必要性を実感したのではないだろうか。また、参加した生徒の体験は学校内や家庭、地域で語られ、他の生徒や父母に対しても少なからずとも好影響を及ぼしたようである。この実践の学校側のねらいは達成されたのではないだろうか。

なお、この実践における当館の役割は、ボランティア活動の場を提供することのみならず、活動のねらいの一つでもある「地域の歴史的文化財に触れることにより、学習の場としても位置づける」ことへの学習支援であった。そこで、主たる活動の場となる稲荷山古墳を中心とした埼玉古墳群の概要をまとめた小冊子「忍中学校ＪＲＣ活動参加記念『稲荷山古墳と鉄剣』」を作成し、参加者全員に配布した。そして、活動前の全体説明会において館長より解説を加

古墳の草刈り

行田　忍中生徒が美化活動

H.8.6.5 (水) 埼玉

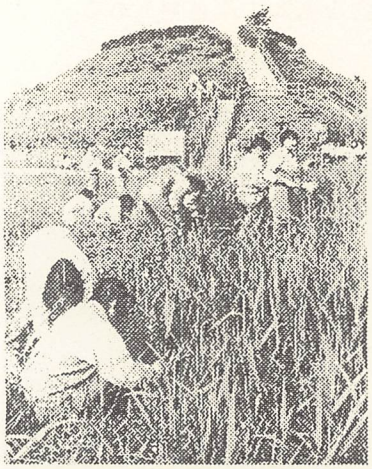
貴重な文化財である古墳を自分たちの手で守ろうと、行田市忍中学校(佐藤武司校長、生徒数五百八十八人)の生徒がこのほど、さきたま古墳公園で除草作業を行った。

今年は地域の美化活動に取り組もうと、ＪＲＣ（青少年赤十字）委員会がポスターなどで全校生徒に呼びかけたところ、予想を大きく上回る二百二十一人が参加。「五十人も集まれば来年につなげられるか」と思っていた先生たちを驚かせた。

県立さきたま資料館では、この機会を古墳についての学習の場にもしてもらおうとパンフレットを配布し、作業前に横川好富館長が古墳全般について説明。その最中にも、部活を終えた生徒たちが次々と駆け付けた。

生徒たちは丸墓山古墳、二子山古墳、稲荷山古墳に分かれて作業を開始。稲荷山古墳で腰の高さまで茂った雑草を刈り込んでいた女子生徒は「ストレス解消になる」。丸墓山古墳では階段部分にいっぱいに生えたササのような雑草を一つひとつ丁寧に抜いていた。

ＪＲＣ担当の小野田誠教諭は「大勢が参加してくれて、生徒たちのボランティア意識が意外に高いのに驚いた。この分なら学校の恒例行事にできます」と話していた。



稲荷山古墳では中学２年生が、腰のあたりまである雑草を刈り込んだ

埼玉新聞（平成８年６月５日付）

題名　ボランティアを活発にするために

二年　六組　三三番
氏名（久米華絵）

六月一日土曜日、忍中学校の参加希望者、二百二十一人は埼玉古墳へ除草ボランティアへ行きました。二年生八十七名は稲荷山古墳を、一年生七十七名は稲荷山古墳前方を、一年生五十七名は丸墓山古墳を除草しました。

こしとりも、高い草を、一時間以上かかりつづけるのは、楽ではありませんでしたが、後に自分の住んでいる行田のほこれる古墳どんをきれいにすることの手伝いができたというなんともいえない充実感をおぼえました。またやりたいと思いました。この思いは、私だけでなくボランティアに参加した全員が感じた思いだと思います。そしてぜひ、私だけでなく、また、このようなきかいがあったら参加したいと思っていると思います。

今回ボランティアにかるい気持ちで参加した人もいると思います。しかし、前々からやってみたいと思っていた人も多かったと思います。実際に予想していた参加人数の四倍もいたのだから、きっとおおぜいの人が、このきかいをまっていたのだと思います。そのようなきかいをまっているのは、忍中生だけではないと思います。行田市民、埼玉県、日本国民、忍中だけでも、予想人数の四倍もいたのですから、日本国民では、多くの人々がまっています。

自分から、そのきかいをつくらないというのは、本当のボランティアではないかもしれません。しかし、ただでさえ、ボランティアの活発ではない日本。そんなか、自分たちで計画し、行動するのは、とても困難で、勇気のいることです。だからまずそのようなきかいをどんどん増やし、参加し、ボランティアを活発にさせれば、自然とみずから行動できる雰囲気も、でき上がると思います。だから、どんどんこのようなボランティアのきかいを増やし、活発にすることが大切だと思います。

全体説明会において館長より解説を加えた。博物館等施設が、学校教育と連携しボランティアを受け入れる場合、ボランティア精神を培うことはもちろんのこと、地域社会の一員として地域の史跡や文化財等を大切にする心を育んでいくことは極めて重要なことであろう。

そして、この実践は本年度、同校の呼びかけによって、近隣３中学校合同の「さきたま古墳群除草ボランティア活動」へと発展した。夏休みの暑い中にもかかわらず約１５０人が参加し、将軍山古墳西側の除草に取り組んだ。ボランティアを通じて学校間の連携が図れた実践でもあり、大きな成果が得られた。前掲の感想を書いた生徒が語っているように、ボランティア活動が根付くまで、学校教育も社会教育も子供たちにこうした機会を提供する必要があるのではないだろうか。それは、子供たちがボランティアと体験的に関わるきっかけをつくることにもなるのである。

5　総合的な学習とボランティア

２００２年より、社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成すべく、教科の枠を超えた横断的・総合的な学習を展開するための「総合的な学習の時間(仮称)」が教育課程に組み込まれスタートする。教育課程審議会の『中間まとめ』は、この学習活動について、「例えば、国際理解・外国語会話、情報、環境、福祉などの横断的・総合的な課題などについて各学校が創意工夫を十分発揮して学習活動を展開するものとする。その際、自然体験やボランティアなどの社会体験といった実体験、実験・観察、調査やものづくりなど体験的な学習、問題解決的な学習を重視する。」とし、ボランティア体験を組み入れた「総合的な学習の時間(仮称)」の展開を求めている。

ところで、前掲の行田市立忍中学校のＪＲＣ委員会を中心とする「埼玉古墳群除草ボランティア」は、ある意味では環境や福祉等に関わる「総合的な学習」といえよう。また、この活動のねらいには、道徳、特別活動、そして社会科において培うべき資質や能力が盛り込まれており、実際の活動によってそれらの資質や能力が培われていることを生徒の感想文等からも十分に読みとることができ、生徒主体の効果的な体験学習であったといえる。付け加えるならば、例えば古墳文化に関する学習(社会科)や古墳公園内の植物の学習(理科)を問題解決的学習として、また埴輪等の製作を体験的な学習として組み込むことも考えられる。さらには、事前あるいは事後の学習として、ボランティアについて討論やディベートをしたり、世界と比較しながら、我が国のボランティア活動の現状について調査・研究をするなど、「ボランティア」をテーマとした様々な学習活動が考えられる。保護者や公民館等と連携し、地域の人々をも巻き込んだ活動とすることも可能である。

学校の創意工夫を生かし、多様な活動を展開できることに「総合的な学習」の特色がある。受け入れる側としてもそうした点を理解し、学校の指導計画に沿い、より望ましいかたちで支援・協力ができるよう連携を図っていきたいものである。

6　おわりに

ボランティアは学びの世界……。これは、「さきたま青少年ボランティア」委嘱式において、埼玉県立南教育センター社会教育主事田丸淳哉先生より贈られた言葉である。さきたま青少年ボランティア一人一人がこの言葉を実感したのではないだろうか。

生涯学習時代を迎え、博物館等も「学び」の場を提供するとともに、「学びの世界」になっていかなければならないと思うのである。